

## 民話と方言で取手再発見！プロジェクト

〔事業責任者〕

（自治体等側）取手市立図書館・館長

大手 勉志

（大学側）茨城大学人文社会科学部・教授

杉本 妙子

### 連携先

取手市立図書館

### プロジェクト参加者

大手 勉志（取手市立図書館館長，  
事務担当責任者）

本谷 紀子（取手市立図書館課長補佐，  
企画担当）

海老原佳美（取手市立図書館主事，  
立案・企画・実施）

矢部晃一郎（取手市立図書館係長，  
企画・広報担当）

杉本 妙子（茨城大学人文社会科学部教授，  
企画・立案補助・講話・大学  
側実施責任者）

### プロジェクトの実施概要

#### ① プロジェクトの目的

茨城県南に位置する取手市は都心のベッドタウンとして発展してきた地域であり、多くの住民は自身の住んでいる地域に関心が低く、また土地の民話や方言の伝承が乏しい。このような状況の中、取手市では「子ども読書活動推進計画第一次・第二次」を策定し、取手市立図書館と読み聞かせボランティアが定期的に小学校を訪問して読み聞かせや昔話の語りを行い、児童の読書推進を図っている。

本プロジェクトでは、①地域での活動が期待される語り手の育成を茨城の方言や昔話に注目しながら行い、②その語り手による小学校等での語りの実践や茨城方言についての学びを

とおして、取手市民が地元として取手地域を再認識することを促し、③これらの活動を地域活性化に発展させようとするものである。

そのための、具体的な取り組みとして、茨城方言（取手方言を含む）に関する講座の実施、語り手育成と語り手の活動に資するための取手地域の昔話集の作成、小学校等への読み聞かせ・語りをとおした地域文化の次世代への継承、語りの会開催による地域文化の発信などを、本プロジェクトで行っていく。

#### ② 連携の方法及び具体的な活動計画

茨城方言（取手方言を含む）に関する講座を実施する。茨城大学側からは杉本が方言と生活文化の講話を、取手図書館側からは取手や地域周辺に伝わる昔話しの語り・方言レクチャーや方言による語りの聞き比べを行う。また、語り手の活動に資するため取手地域の昔話集を作成し、子どもでも楽しく読めるような文体とし、さらに語りのテキストとしても活用できるようにする。

#### ③ 期待される成果

取手市民ボランティアが取手地方の民話や方言で語る力を身につけることにより、小学校等での読み聞かせ・口承活動・語りをとおした地域文化の次世代への伝承が幅広く進められる。また、取手地域の昔話集を広く県内公共図書館や読み聞かせ団体に寄贈し、取手の魅力を発信することができる。

取手市が当事業を行うことにより、周辺市町村の読み聞かせボランティアが自分の住む市町村を見つめなおし、方言、昔話による地域活

性化が望める。

### プロジェクトの実施成果

#### ① 活動実績

＜取手の方言と昔ばなしを語る会開催＞

令和1年12月15日 取手市福祉交流センターにおいて講座を開催した。

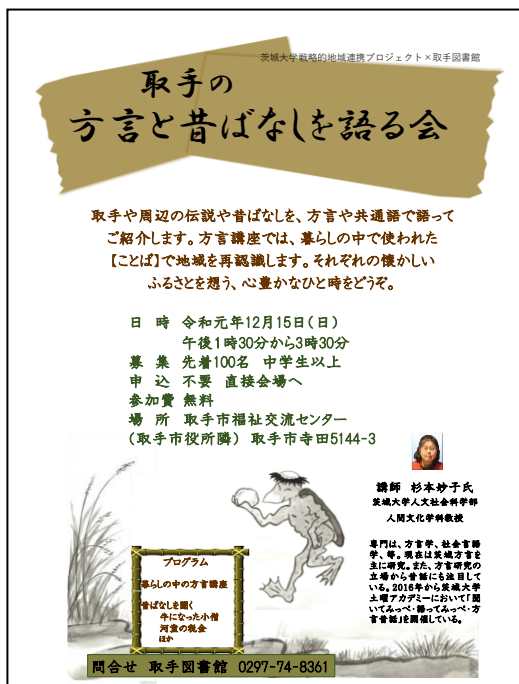


図1 開催ポスター

取手周辺の昔話の語りを取手市民に聞いてもらったり、方言による日常会話のレクチャーを行うことにより、暮らしの中で使われた地域の言葉をなつかしく感じ、次世代に繋げてもらおうと企画・実施した。

講座の周知として、A2サイズのポスター、A4サイズのちらしを作成し、ポスターとちらしを県内公共図書館や市内施設、利用者などに配布した。

講座当日は、会場において、関係者による布絵や昔話の原画を展示し、昔話をより身近に感じてもらえるよう工夫した。語りの昔話に関係する本や紙芝居の展示も併せて行った。



写真1 昔話の布絵の展示



写真2 関連本の展示



写真3 原画の展示

＜講座内容＞

第一部は杉本が「方言と昔話」というテーマで講話を行った。

方言と昔話は生活の中で引き継がれているものだが、時代とともに次第に失われつつある。しかし、方言は地域ごとに違いがあり方言でしか表現できないものがあり、近年は国語教育でも地域の生活や文化を支える存在と

して、方言や昔話の重要性が見直されており、本事業は取手の伝承文化への取り組みの一歩となる重要性があることなどを説明した。



写真5 講座の様子②

第二部はスライドを利用した朗読や共通語での昔話、茨城土地ことばでの昔話や方言の聞き比べ、カーテンシアターなど、楽しみ方がいくとおりもできるように工夫した。

登壇者の多くは令和元年11月30日開催の文化庁委託事業・茨城大学図書館土曜アカデミー「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」における講師でもあり、会の内容の大枠も「取手の方言と昔ばなしを語る会」では同様なものとしたので、打ち合わせ・講師依頼・上演時の著作権の許諾などもスムーズに短時間に行うことができた。



写真6 カーテンシアター



写真7 方言講座

#### ＜取手の昔話集刊行＞

令和2年1月15日「取手のとげぬき地蔵と周辺の昔ばなし」を刊行。昔話15話収録。

一つの話を取手の方言版と共通語版で収録し、同じ話のニュアンスの違いを楽しんでもらえる本にした。小学生にも読めるよう小学3年生までに習う漢字で編集し、難しい固有名詞の漢字にはルビをふった。

昔話集の作成にあたっては、原話の著作権の二次的使用許諾申請手続きを行い、取り上げる原話の選定・原話の再話依頼を行った。

方言については取手市在住の郷土史家に指導を受け、史実検証は埋蔵文化財センター学芸員の協力を得た。昔話集の全体作成は、「七絃の会」の協力を得て進めた。「七絃の会」は、茨城県の昔話を語りやすいように再話をしている団体で、上述の茨城大学図書館土曜アカデミーにも語りの講師として参加している。

最終編集は、取手図書館と杉本とで行なった。



図2  
取手の昔話集  
(表紙)

図3 朝日新聞 2019年12月4日朝刊



・昔話集は、市内読み聞かせボランティア、市内図書館、国立国会図書館、茨城県内公共図書館、取手市内小中学校図書室、保育所、保育園、子育て支援センターなどに広く配布した。取手市外の読み聞かせ団体からも問い合わせが多かったため、茨城県南市町村を中心に読み聞かせ団体にも寄贈した。方言と共通語の対比が面白く、すぐに子どもたちに話を伝えていけるとの評価を得た。

③ 今後の計画と課題

・「取手の方言と昔話を語る会」では方言に慣れ親しんだ60代前後の人が多数だったこともあり、今後図書館活動や学校訪問、さらに市民ボランティアのお話し会をとおして幅広い人に興味を持ってもらえるように活動していく。

令和2年度も同講座を企画し、市民により郷土を身近に感じてもらうように計画をすすめる予定である。

<ボランティアの育成>

令和2年2月21日に、読み聞かせボランティアを対象に、取手の民話と方言の理解を深める勉強会を行った。「取手のとげぬき地蔵と周辺の昔ばなし」をテキストにし、その内容についてより理解を深める研修を行った。

・ボランティアの育成としては、図書館職員とボランティアとの年4回の勉強会においても取手地区周辺の民話の語りを中心としたものに力を入れていき、地域文化の発信をしていきたい。

② プロジェクトの達成状況

・本プロジェクトで実施した「取手の方言と昔話を語る会」では定員100名に対して138名の参加があった。アンケートを実施したが、方言の良さを感じられた・あらためて昔話しを読みたい・懐かしさを感じて身内を思い出した、などと好評だった。また、改めて方言を次世代に繋げていくことはよいと感じている方が多く、今回の方言と昔話の講座を通して、地域を見直し、地域文化を育むことができたと考えられる。